

アミーゴ会だより

2011年7月
(メルマガを改題)
No. 7: 2011-VII



発行人：上原尚剛
編集長：渡辺道雄
編集人：河嶋正之
事務局：関口重雄

ルイス・カバーニャス大使の離日に当たり



メキシコ・日本アミーゴ会
会長 上原尚剛

毎年秋に開催するアミーゴ会総会後の懇親パーティに奥様と共に参加頂き、会員の皆さんと親しく懇談頂いたミゲル・ルイス・カバーニャス駐日大使がイタリア大使に転任されることが決まり、7月17日に日本を立ち帰られました。

大使は2004年9月に着任されて以来、歴代駐日メキシコ大使の中で最も長くほぼ7年に亘って大使を務められたこととなります。戦後1952年に日本との国交回復に伴い、後にノーベル文学賞を受賞したオクタビオ・パス氏が臨時大使として大使館を開設してからルイス・カバーニャス大使は20人目ですが、これまでは長くても3年で交代していますので7年は異例とも言える長さでした。

大使が着任された時は丁度日本とメキシコの自由貿易協定 (FTA) を含む経済連携協定 (EPA) の政府間交渉が纏まり、当時の小泉首相がメキシコでフォックス大統領との調印式に臨んだ時でもありました。

このメキシコとの EPA はわが国にとってはシンガポールに次ぐ二番目の EPA でしたが、シンガポールとの交渉では農産品などセンシティブな問題は全く無かった一方で、メキシコとの交渉では豚肉、鶏肉、オレンジジュースなど乗り越えねばならない問題が多々ありました。その意味でメキシコとの EPA は実質的には日本にとって第一号と言って良いもので、1888年のわが国初の平等条約である日墨修好通商条約と同様、またメキシコがその後の他の国との交渉に道筋をつける歴史的にも極めて重要な協定の締結国となりました。

大使はこうして両国の経済交流と親善関係が新たな幕開けを迎えた重要な時期に着任されたわけで、今日に至るまで精力的に両国の関係発展に尽力して来られました。メキシコとの EPA は2005年4月に発効しましたが、その後両国間の貿易量は順調に拡大し2010年の日本のメキシコからの輸入は2004年に比べ50%近く伸び、日本からメキシコへの輸出も30%増大するなど経済面での日本におけるメキシコの存在感が増して来ています。

経済関係の深化に伴い観光も含めた両国民の交流も活発化することを予測された大使は、メキシコから日本への直行便の開設に奔走され両国政府と折衝を重ねた結果、2006年11月にアエロメヒコが週2便成田に就航する事になり、日本航空が直行便を廃止した現在は唯一の直行便として週3便運航している事は皆さんご存知の通りです。

また2009年から2010年にかけては、1609年に御宿にロドリゴ・デ・ビベロに乗せたメキシコのカレオン船サン・フランシスコ号が漂着してから400年になるのを記念しての各種の講演やセミナーが行われましたが、大使はこれらイベントを積極的に企画、実行され、これまでメキシコに馴染みが薄かった人達もメキシコに対する認識を高め親近感を深める上で大きな功績を残されました。

日本での7年を振り返っての感想をお聞きすると、仕事の面では着任以来両国の経済交流を活発化させることが出来、また政治的にも在任中二度も大統領の訪日を実現出来た事など自分としては後顧の憂い無い結果を残せたと思うし、生活の面でも子供の教育も含め大変充実した時期を過ごす事が出来て大変満足していると話されました。

明るく気さくなお人柄で日本社会に溶け込まれ、これまで以上に両国の関係強化に尽力された大使が離日されるのは誠に寂しい限りですが、今後益々のご発展を皆で心からお祈りしてお送りしたいと思います。



大使夫妻と上原会長「抱擁」除幕式(2009年11月21日)

= 目次 =

1. ルイス・カバーニャス大使の離日
2. メキシコと私(島田てるひ)
3. メキシコに暮らして(出雲良治)
4. 私の本棚：『メキシコの悲哀』(森 和重)
5. 講演会レジュメ：『悲劇のメキシコ皇帝マクシミリアン1世』(菊池良生講師)
6. マンゴーの木を育てよう！(霞谷 修)
7. アミーゴ会の活動報告・催事案内

メキシコと私

会員 島田てるひ

7upの飲料缶



います。

「7up をください」-1977 年初めて搭乗したメヒカーナ航空の機内で、あのソフトドリンク缶は何て読むのかな？-前の座席の人の発音を聞いてそれを真似して注文してみました。「スイエテウップ、ポルファボール」。無事に通じてほっと一息。シュワーとレモン風味の炭酸はとても美味しく斬新な味だったことを憶えています。

それから 10 年後の 1987 年、私は縁あって(株)メキシコ観光に就職、メキシコ出張時の機内で同じ 7up を注文したところ、フライトアテンダントに「セブンナップね！」と言い直されました…。古臭い言い方と思われたのかもしれませんが、メキシコもすっかりアメリカナイズされているんだなあと感じたものです。私が初めてメキシコを訪れたのは、中学 1 年生の夏休み。今の海外旅行ほど手軽でなく、手続きも多く、旅券申請や予防接種に行き、家族で着々と準備をしました。為替レートは 1 ドル=300 円ほどで、1 ドル紙幣がそれは貴重に感じたものです。ペソ硬貨も日本円に比べるとずっしりと重たくて、お釣銭でお財布もいっぱいになってしまうほどでした。カンクンのホテルゾーンには人もまばらでホテルがぼつりぼつり、それが今では一流ホテルが立ち並び世界屈指のビーチリゾートとなりました。

羽田から米国経由でメキシコ線に乗り換えた途端、機内の雰囲気も機内食の匂いも全く未知のもので圧倒されました。それが今はメキシコの空港内のコロンの香りや市街の排気ガスの匂い、市場のトルティーヤの香ばしい匂いなどにとっても懐かしさを感じるようになりました。現在はアエロメヒコが就航し直行便で、最短 13 時間ほどでメキシコに行くことができます。1997 年には夫と長男と、昨年 8 月には京都グアダラハラ姉妹都市



京都親善団の皆さんとグアダラハラ市庁舎にて

30 周年記念親善団(京都メキシコ文化協会主催)に長女と参加し、記念式典など貴重な経験をさせて頂き楽しい思い出を胸に帰国しました。



デルモンテの家のナス畑

墨画家の父 島田正浩

メキシコオリンピックの前年 1967 年、世界旅行を計画していた父(当時



1967 年羽田空港の集合写真

35 歳)は、最初に降り立ったメキシコの魅力にノックアウト。それから 19 年間メキシコに通い描き続けていました。

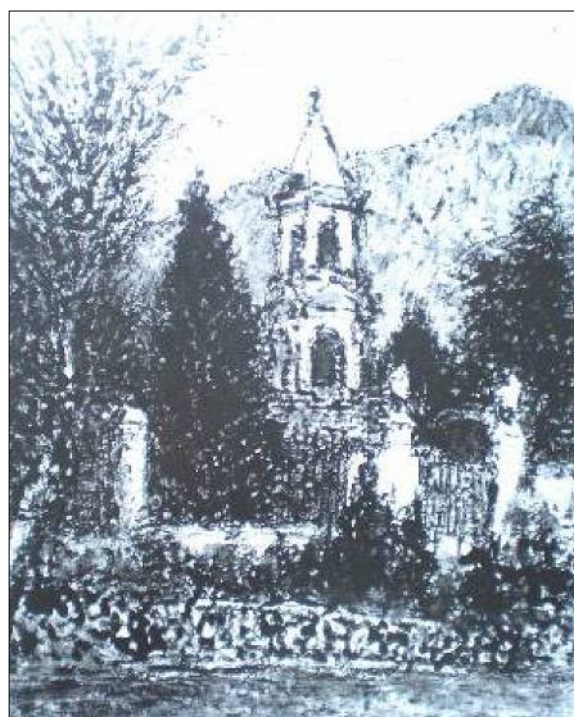
そしていよいよメキシコに住んで腰を据えて絵を描きたいと言い 1986 年、チャパラル湖畔に居を構えて 21



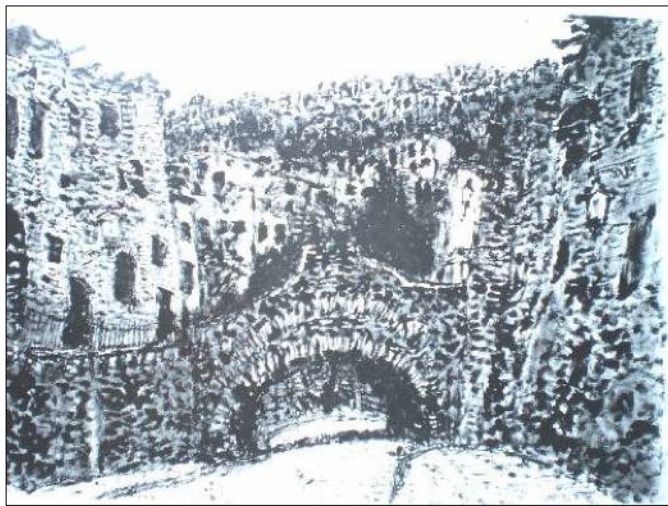
オルモソンの家

年。「サンアントニオ村風景」をはじめ「グアナファトの橋」、「ウシュマルのピラミッド」などメキシコの世界遺産の数々を描き続けてきました。畳 1 畳大など、その作品数は 500 点以上に及びます。

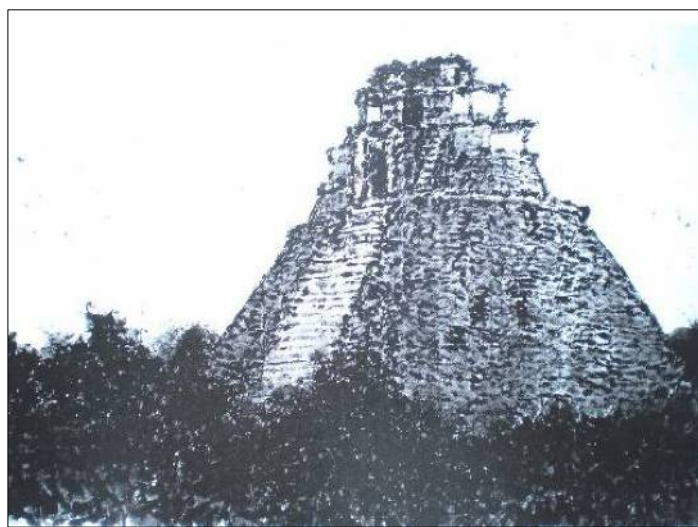
父の作品テーマは「墨で描くメキシコ」。カラフルな家々や色彩溢れるメキシコの風景を墨で表現しているという点で、唯一無二、宇宙で、世界でも父一人だけのオリジナル作品です。メキシコの知人からは「シマダのテクニカは神様からの贈り物」と絶賛され芸術的に評価されつつあります。作品を観ていると、照りつける太陽と風景の「色」が浮かんでくるから不思議です。



「村の教会」90x68cm



「グアナファトの橋」 68x90cm



「ウシュマルのピラミッド」 68x135cm

絵を描くということ

父はチャパラ湖畔デルモンテの家では畑を耕しナスやゴボウなど野菜を育て食し、またよく葉書に描いてはエアメールで送ってくれていました。そして今、私も義父に教わりながら小さな畑を耕し、野菜や花々などを収穫しては水彩で描いています。またメキシコへの買付け渡墨の傍ら、水彩道具を携えてメキシコの花を描くようにもなりました。民芸品の買付けをしている状況の中で、ほっと落ち着いて絵を描く時間はなかなか取れないのが悩みの種で、朝描いたハイビスカスは夕方にはしぼんでしまっているし、花卉の色さえも、朝の光と夕焼けの光の中では違って見えます。ホームステイ先の家族の予定行動にも合わせて外出しなければなりませんし、庭で1時間も描くとじりじりと肌が日焼けします。絵具道具一式を出しっぱなしで帰宅したらカチカチに乾燥していたこともありました。描くからには描く事に集中しなければなりません。父の言っていた「腰を据えて描きたい」とはこのことだなあと思いました。

メキシコは日本では観られない熱帯の植物も多く、太陽のせいか色が濃く鮮やかに写り、その色を水彩絵具で表現することの楽しさと難しさを感じています。日本では切り花で売られているものが、メキシコでは土の上に生き生きと伸びて咲いているのを観ては描かずにはいられません。かつて母も、フォルモソツの家に住んでいる頃、その色とりどりの花に魅せられ描いていました。チャパラは温暖な土地柄から1年中花が咲き乱れ、まる

で花園の中に家があるような、人々も景色も本当に素晴らしいところでした。



てるひ 水彩画の作品「びわの実」 F10 530x455mm

メキシコと私

2001年に「アルテシマダ」を創設。現在は島田正治の展覧会をプロモートし、サイトではその作品ギャラリーとメキシコ民芸雑貨のインターネットショップを運営しています。ブログ『メキシコと私』は日々の事、メキシコ紀行・グアテマラ紀行などを徒然なるままに綴っていますのでどうぞご訪問ください。

おかげさまで今年アルテシマダは10周年を迎えることができました。これもひとえに皆様のお力添えがあったの事と感謝の気持ちを忘れず、これからも精進して参りたいと思っております。

また将来は学芸員の資格を生かし、島田正治の作品、プリミティブな絵付けの壺やトナラ焼きなど蒐集した貴重なメキシコ民芸品を飾る、メキシコを発信できるギャラリー(実店舗)を開設したいと考えています。

長年メキシコに通って感じている事は、歳を経るごとに見えるものが違ってきているという事です。花といえばブーゲンビリアだった私が、ハカランダを心ゆくまで観ていたい、たくさんの花々を描いてみたい、と思うようになりました。若い頃には見過ごしていた民芸品やタイルの色柄の素晴らしさに気付いたり、メキシコの友人たちの広いものの考え方なども理解できるようになりました。

4年前に両親が病気をした時には、日系人の方々、メキシコの人たちには言葉では言い尽くせないほどお世話になり、懐の深さを感じました。現在は両親とも元気になり日本で暮らしていますが、またいつか、皆でチャパラを訪れたいと思っています。

父の代から数えると半世紀近くお世話になってきているメキシコに心から感謝し、これからゆっくりと恩返しをしていきたいと考えています。(了)

【編集部注】島田さんのインターネットショップとブログのアクセスポイントは下記の通りです。

*アルテシマダの URL : <http://www.arte-shimada.com>

*ブログ「メキシコと私」 : <http://blog.arte-shimada.com>

アルテシマダのウェブでは、正治氏の全作品集、それに目利きのバイヤー島田てるひさんが選び抜いたメキシコのアート&民芸品がたっぷり紹介されています。

メキシコに暮らして (1989年1月～1994年9月)

アミーゴ会 大阪幹事 出雲良治

♥メキシコあれこれ♥

昭和天皇崩御で日本全体が喪に服していた1989年1月9日に日本を立ち、以来5年9か月を家内とともに、この太陽の国メキシコで過ごすことができました。

緑の少ないメキシコで、ブーゲンビリアとハイビスカスの鮮やかな赤、DFではハカラランダの薄紫、そしてDF近郊の原野に咲くメキシコ原産のピンクのコスモス群が印象的でした。メキシコ料理は、トルティージャは最初は癖があり嫌いでしたが、慣れてくるとなかなか美味です。サルサメヒカーナはどの料理にも合いますし、アボガド好きな私はワカモーレが大好き。そして、huachinango al mojo de ajoはにんにくの香りが染み込みとてもおいしかった。日本食レストラン「S」は焼き鳥も良いがサングリアが絶品でテキーラが美味しく、「M」のメロンエラードはぜひたく感を味わえました。日本食料品店はビデオレンタルも併設されており、便利で良くお世話になりました。

そんな中、メキシコ生活での一番の楽しみは国内の遺跡・リゾート地等への旅。マヤ・アステカ遺跡群。アカプルコ・カンクーンはじめ随分色々な場所を訪れた。当時大半の会社で低地休暇制度が採用されていたことも、そういう機会を増やしてくれて、DF近郊のクエルナバカにもよく訪れた。DFを離れると空気は澄み、例えばピンク色の建物に包まれたやさしい雰囲気のある街サカテカスでは、夜空に鮮やかな満天の星がとても印象的でした。

♥旅行中の出来事♥

ベラクルスに行く途中、プエブラ街道で車がパンクし、車を道の端に寄せて降車していると、白バイがやってきました。当時評判の悪かった警察です。一瞬「ヤバイナ」という感じ。ところがあにはからんや彼は事情を察すると、手際の悪い私を退けて、自らタイヤ交換をしてくれたのです。修理完了後、失礼にも私がお金をわたそうとすると「no gracias」と受け取らずに立ち去ったのです。誠に信じられない光景でした。メキシコ在住中唯一の、素敵なポリスさんの思い出です。

また、オアハカからプエルトエスコンディードへ向かう10人乗り程度の飛行機に乗ったときのこと。なんと機体の扉が半開きのままで離陸するのです。低空でしかも短時間のフライトではありましたが、「機体が傾いたらどうしようか？」なんて、ずっと考えてましたが、でも他の乗客のみなさんは慣れているのでしょうか？別に気にする風でもなく、相変わらず陽気なメキシカン達でした。

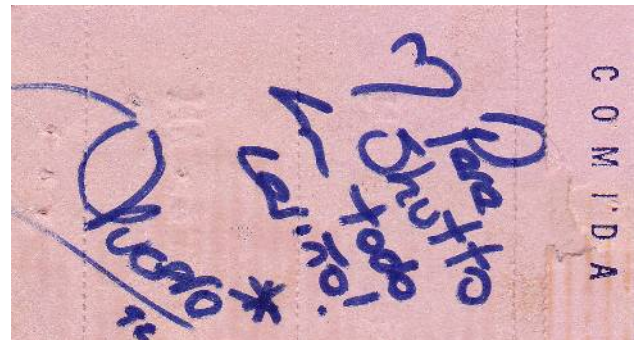
パレンケ遺跡・ビジャエルモッサからオアハカに向かう途中、陽気なメキシコ人のおじさんと知り合いました。彼は自称ギター演奏家であり、私達に「今晚オアハカのホテルで自分が演奏するから、聴きにおいで」とのこと。折角なので出かけてみると、キューバ人の若いギタリストと二人で、なかなか心にしみる曲を演奏していました。その中に一般には有名ではないが、気になる曲が有って、あとで調べてみるとアンバーロ・オチョアの歌(曲名不

詳)でした。通常メキシコの音楽として知られるマリアッチなどの陽性な歌とは趣を異にするもので、低く・陰湿で・切々としたメロディーは、琴線に響くものがあり、メキシコ音楽の違う面に触れた感じもしました。

メキシコ音楽は大変好きでしたのでテレビの音楽番組は楽しみで、特にラウル・ベラスコ司会の **Siempre en Domingo** は良く見ました。いわゆる流行歌の世界なんだろうが、女性ではジュリ、ダニエラロモ等が活躍し、男性では何といってもルイスミゲル(*una historia de un amor* 他多数)が、駐在員の奥様達に絶大な人気がありました。また、ワールドカップ仏大会のテーマソングを歌い世界のメジャーになったリッキーマーティンもまさにデビューしたてのころです。一方、可愛らしい子役から出発し、長じて歌手に転進して「中南米の恋人」と呼ばれ、**canCIÓN ranchera** を歌って圧倒的な人気を博していたのがルセロでした。

♥中南米の恋人 ルセロ♥

ルセロさんにはちょっとした思い出があります。偶然ですが、ニコラスサンファン通りにある彼女と同じアパートに住んでいたのです(彼女の住んでいたのは最上階2フロアのペントハウスで、全然別世界ですが一念のため)。ある日偶然エレベーターで鉢合わせしました。狭い空間、わずか数秒の好機です。「サイン貰わなくちゃ!」「何か書けるものが有るか?」あわてて背広のポケットを探したら、たまたま会社の食堂の食券綴りしかない。ままよとその裏にサインしてもらいました。その後時々顔を合わせる機会もありましたが、彼女はスター



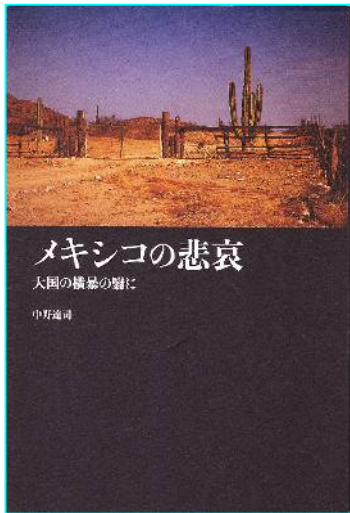
なのに少しも偉ぶったところがなく、とてもきさくに明るい声で私達に **Hola! Buenos días.**と挨拶してくれました。市内の劇場(El Patio 他)で行われる彼女のショーも何度か見に行きましたが、夜11時頃に始まって、終演は1時頃が普通。彼女の曲「ya. no」にあわせて、ハンカチを振り回したりしたこともあり。私達がメキシコを離れる際には、彼女の出演するTV番組のスタジオ収録に招待してもらい、楽しい時間を過ごしました。少しハッピーな思い出です。

¡Cómo pasa el tiempo!—あれから17年。残念ながらその後再訪する機会も無く、今ではカラオケで歌う「ベサムーチョ」と三歳の愛犬チワワ「テアモ(te amo)」がメキシコを思い出させてくれます。(了)

【編集部注】筆者の出雲(しゅつと)会員はパナソニック社駐在員としてメキシコに滞在。現在は同社子会社に勤務し、企業のグローバル事業展開を支援しています。

『メキシコの悲哀—大國の横暴の翳に』

中野達司 著 松籟社 2010年11月刊 1600円＋税



メキシコでは米国人を”グリンゴ”と呼ぶ。単なる蔑視の言葉ではなく、深層に怨嗟を含むまなざしが見え隠れする。本書の表題にとられた「あわれメキシコ、…、米国にかくも近い」とは別な言い回しで、「神はメキシコの幸せと不幸を同時に与えた。最高の幸せはこの豊かな大地と人だが、最大の不幸は余りにも北米に近いことである」と嘆く。北の大国・米国に対する宿命的な怨嗟の叫び声である。

本書はこの隣の巨大国の、過去のメキシコに対する横暴で不合理な振る舞いに憤りを感じ、メキシコ人の視点でメキシコと米国との歴史上の真実を明らかにしようと試みた最初の本と言える。

1810年イダルゴ神父が「ドローレスの叫び」を掲げスペインからの独立運動を始めてから約10年間、多大の犠牲を払った闘争の後に、1821年メキシコはクリオーリョによる独立を達成した。当時メキシコがスペインから引き継いだスペイン領ヌエバ・エスパーニャの領土は、西部海岸のカリフォルニアから南部テキサスに至る広大な地域であった。一方、隣国・北米では1620年にイギリスの清教徒によるプリマス移住以後、植民地化が急速に進み、1776年には英国からの独立を宣言し、南部・西部への領土拡大を図っていた。

メキシコは独立後、不幸にも政治家の権力闘争による政治的な混乱が長引き、これを利用し領土侵略を図る新興国米国を始め、旧宗主国スペイン、フランス、イギリスなどの列強が植民地化のため、虎視眈々と介入の機会を狙っていた。さらに、米国は中南米全体の支配化を狙い、1823年にはモンロー主義を宣言し西半球の盟主として、北米南西部の領土獲得をも図っていた。既に1803年フランスからルイジアナ（北米中部13州を含む大領土）を購入していた米国は広大な国土を有する大国になっていた。一方、隣接するテキサスは先住民を除くとメキシコ人の人口は希薄であり、多数の米国人が勝手に入植をしていた。1836年には米国の後押しもあり、移住者は弱体化したメキシコ政府からテキサス独立を宣言し、1845年には米国領に合併された。さらに、1846年には米墨戦争を仕掛けて1848年には北はカリフォルニアから南はテキサス以西のメキシコ領の約半分を獲得した。

また、フランスはメキシコ政府の債務不払いを理由に、メキシコ皇帝としてハプスブルグ家のマキシミリアン大公を派遣し支配（1864年－67年）を図るなど様々な介入を行った。

本書は、当時の時代背景とメキシコの独立から革命に至るまでの歴史的な事象を詳細に取り上げ、米国の領土拡大戦略に翻弄されるメキシコの不幸、フランス・ス

幹事 森 和重

インなどの欧州勢による侵略なども含め、メキシコ側の立場で説明しており、メキシコ近代史を理解する上で、多様な資料を提供して呉れる貴重な著書である。



図2 米国の領土拡大

Robert A. Divine, et al., *America, Past and Present (Seventh Edition)*, Pearson Education, Inc., 2005, p.361 をもとに著者作成

なお、本来メキシコ人と言っても、先コロンブス期の先住民（30%）、植民地生まれのスペイン系メキシコ人（9%）、両者の混血のメスティッソ（60%）と複雑な構成になっており、それぞれの立場では受取り方が異なると思う。著者も述懐しているが、例えば先住民にとっては、元々自分たちのものであった土地に外部から支配者が勝手に来て、また交代したに過ぎないが、この視点が欠けている点は否めない。次の機会にこの点が補足されることを期待する。（了）

追記：本書の著者中野達司氏による講演会が下記の通りメキシコ・日本アミーゴ会主催で開催されます。奮ってご参加下さい。

☆☆ 第18回メキシコ歴史文化講演会 ☆☆ 主催：メキシコ・日本アミーゴ会 後援：在日メキシコ大使館

「メキシコ独立200周年・革命100周年記念講演会」

2010年はメキシコの独立200周年・革命100周年でした。メキシコ・日本アミーゴ会は、記念行事の一つとして、独立・革命時代の歴史・背景・問題点などの理解をさらに深めるため、同時代に関する専門研究者による4回シリーズの講演会を企画しました。今回はシリーズ第3回です。是非ご参加下さい。

<第18-3回講演会>
演題：「メキシコ独立から革命に至るまでのアメリカとの関係」

講師：中野 達司 氏（亜細亜大学教授、国際関係論専攻）

著書：『メキシコの悲哀』など

日時：8月12日（金）18:00～20:00

場所：在日メキシコ大使館 別館5階

「エスパシオ・メヒカーノ」

申込：info@mex-jpn-amigo.org 宛て氏名・電話を添えて

『悲劇のメキシコ皇帝マクシミリアン1世』

講師 菊池良生・明治大学理工学部教授

第18-2回メキシコ歴史文化講演会は5月27日、講師に菊池教授をお招きし、オーストリア皇帝の弟が何故にメキシコで1867年に銃殺されたのか？を中心に解説して戴きました。本稿は菊池講師作成のレジュメです。1810年の独立・1910年の革命から現在に至るメキシコ近現代史の理解を深める一助になれば幸いです。詳細は『イカロスの失墜』（新人物往来社刊）を参照。[編集部]

ハプスブルク王朝でのマクシミリアンのポジション

・19世紀末から20世紀初頭にかけてのオーストリア帝国→12の民族と5つの宗教がひしめく東欧多民族王朝→19世紀ヨーロッパの必須アイテム、ナショナリズムと鋭く対立→「諸民族の牢獄」と酷評される

・オーストリア皇帝フランツ1世(2世、ウィーン体制=別名メッテルニヒ体制)→フェルディナント1世(虚弱な君主、メッテルニヒの自動書名機械、三月革命で退位)→フランツ・ヨーゼフ1世

・在位68年に及んだフランツ・ヨーゼフ治下、オーストリア大公(=ハプスブルク家の厄介叔父)は50人を超す→「一山いくらのオーストリア大公」と揶揄される→彼らの生活全般を規定するのが全61条からなるハプスブルク家憲

・オーストリア大公の筆頭者がマクシミリアン→兄弟の二歳年下(=生涯、野心の虫に苛まれる)→マクシミリアン、海軍司令官となり、ウィーンを離れ、軍港トリエステの居館を構える→1853年、兄弟、ハンガリーのナショナリストによるテロに遭う→皇帝陛下御快癒慶祝事業としてヴォティーフ教会建立(呼びかけ人はマクシミリアン)

・マクシミリアン、ベルギー王女シャルロッテと結婚→舅のベルギー王レオポルト1世は「老獺な外交官」と権謀術数の人、マクシミリアンの野心に拍車

メキシコ情勢

・ヨーロッパのナポレオン戦争がメキシコに波及→下級司祭イダルゴ・イ・コスティリヤ、独立運動を始めるが鎮圧される→スペイン本国はブルボン家が復位(フェルナンド7世、1812年)→1820年、革命勃発→本国の混乱がメキシコにも波及

・独立運動鎮圧にドン・アウグスティン・イトウルビデが任命される→イトウルビデ、独立派に寝返る→スペインから分離した反動的帝国建設をもくろむ→ヨーロッパの有力王家のプリンスを担ぎ出そうとする(=保険王制)が失敗、1822年、自ら皇帝を名乗る→国内勢力はこれを認めず1823年、イトウルビデを追放

・このイトウルビデ追放からマクシミリアンの銃殺までの44年間に大統領が40人代わる(イトウルビデ追放の立役者サンタ・アナは33年から55年まで6度大統領に就く)→1824~35年は連邦主義政権→35~41年は中央集権主義的共和政権→41~45年は独裁政権→46~53年は連邦主義的共和政権→53~63年は独裁政権

・内戦状態→戦費調達のために銅、錫などの採掘権を始めとし、メキシコの権益は諸外国の草刈場となる→アメリカ合衆国はカリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコを買収併合

・「真正なアステカ人」ベニート・パブロ・ファレス、1861年、大統領となる→教会財産の世俗化(メキシコ

全土の半分が教会領)の宣言→前政権の外国との条約のすべての無効宣言

→借款返済の中止宣言→スペイン、フランス、イギリスは激怒→なかでもフランスの銀行家(元はスイス生まれ)イエッカーは大口債務者モルニー公爵(フランス皇帝ナポレオン三世の異父弟)を通じてフランス政府にメキシコ干渉戦争をけしかける

怪帝ナポレオン三世の登場

・ナポレオン三世、アメリカ合衆国が南北戦争中であることをよいことにメキシコ干渉戦争に乗り出す(イギリス、スペインはメキシコ問題から脱落)→フランス単独の干渉戦争となる→ナポレオン3世と皇后ユージェニーはメキシコ帝国創建を画策し、新皇帝にマクシミリアンを推挙

・マクシミリアンになぜ白羽の矢が立ったのか→マクシミリアン出生にまつわる噂

・マクシミリアンの帝冠受諾には周囲が総反対→妻のシャルロッテと舅のベルギー王だけが賛成→マクシミリアン、兄弟よりオーストリア皇帝位継承放棄の署名を迫られマクシミリアンは署名→メキシコに渡る

ケレタロでの銃殺

・ファレス、パゼーヌ元帥を総司令官とするフラン軍にゲリラ戦を挑む

・皇帝マクシミリアンはまったくの傀儡で、自前の軍隊、官僚組織を何一つ持たない→1865年初頭、オーストリア、ベルギーから義勇軍が到着するも、その数僅か1万、フランス軍の指揮下に入り、激戦地に回される→この年の12月、ベルギー王死去→新王レオポルト2世は義勇軍撤退急がせる

・1865年、北軍勝利で南北戦争を終結させたアメリカ合衆国は66年、「モンロー教書」を適用し、フランス軍のメキシコ撤退を強く要求した最後通牒を突き出す

・フランス軍撤退を始める→マクシミリアン、一旦は退位を決心→皇后シャルロッテ翻意を迫り、局面打開のために単身、ヨーロッパに戻る→ローマ教皇庁でのシャルロッテの奇行→シャルロッテ発病

・マクシミリアン、退位のタイミングを逃し、首都メキシコ・シティを脱出→ケレタロで71日間に及んだ激戦の後、1867年5月15日、マクシミリアンはファレス軍に降伏→ヨーロッパ列強によるマクシミリアン助命の動きが起きる→それ以外にもフランスの文豪ビクトル・ユーゴー、イタリア統一の英雄ガリバルディがファレスに助命嘆願を行う→マクシミリアンの脱走計画も頓挫→6月14日、ファレス政権の軍事法廷はマクシミリアンに死刑判決を下す→処刑日は6月17日に決定→処刑日が2日伸び、19日午前6時半ごろ、処刑地の「鐘の丘」で、狙撃小隊が一斉射撃、最後に止めの一発がマクシミリアンの身体を貫いた。

(了)



マンゴーの木を育てよう!

幹事、葭谷 修

夏、マンゴーの季節が到来しました。ホノルルでも木に実っているリングマンゴーを発見しました。一昔前は、マンゴーと言えば、東南アジアから輸入された黄色い小判型のマンゴーが主流でした。



ジャカルタに駐在中に住んだ借家にマンゴーの大木があり、毎年沢山黄色マンゴーが成りました。そこで、よく近所の悪ガキが長い竿を持って盗みに来ましたが、女中連中が大声で追い返していました。唯一つ、女中達に「1個はご主人様用に残す様に」と要望したものです。



今は市場でメキシコからのリングマンゴー以外に、台湾、アメリカ、オーストラリア、南米からも輸入が一般化して来ております。一方、

国内でも宮崎、長崎を始めとして、沖縄からのものも高価ですが、販売されております。



ご存知の如く、マンゴーには、内部に大きな種子があります。そこで、一度マンゴーの木を育てて見られては、どうでしょうか?

苗を育成させるには、マンゴーを食した後、種子をきれいに洗い、天日干しをします。1-2日で乾燥します。そこで、外皮を割りますと内部から種子が出て来ますので、それを植木鉢に埋めて下さい。夏に植えると、秋までに新芽が出て来ます。しかし、マンゴー自体熱帯植物ですから、冬場は室内の暖かい場所に避寒させて下さい。でないと、枯れてしまいます。マンゴーの実を収穫する為には、勿論温室で育成しないと駄目ですが、十二分に観葉植物として、鑑賞出来ると思います。



日本流でいえば、ゴムの木が観葉植物として一般的ですが、それに準じる様に思います。私は5年程育成させ、1m以上に大きくなりましたが、昨年の厳冬な天候の為に、室内に避寒させましたが、結局枯れさせてしまい、残念な事をしました。皆様も、メキシコからのリングマンゴーを食味される機会があれば、一度苗を育てる試みをされては如何でしょうか? (了)

アミーゴ会の活動報告

事務局長 関口重雄

2011年4月～2011年7月の主要活動

- 『アミーゴ会便り』4月号(No.6)/7月号(No.7)発行
- 第18回メキシコ歴史文化講演会(5月27日)
演題:『悲劇のメキシコ皇帝マクシミアン一世』
講師:菊池 良夫 明治大学理工学部教授
- 御宿アミーゴ会の活動
 - ・会報『エルマーノ』第4号発行
 - ・5月19日藤田邦子展(会員;人形作家)『太平洋を越えた日墨友好の人形展』(千葉銀行御宿支店ロビー)
 - ・6月30日藤田邦子展『二十四の瞳の世界』
 - ・7月7-9日メキシコのそろばん塾関係者一行御宿訪問
 - ・7月25日日墨学院理事長と井上先生がホームステイ協議(12年より隔年実施/10名2週間程度)で御宿訪問
 - ・御宿アミーゴ会会員増加(現在50名以上)
- ホームページ掲載の催事案内
 - ・4月ベラクルス州立大学造形美術学校所蔵品展覧会
 - ・メキシコの著名なウルトラマラソン競技者の講演会
 - ・5月民芸店さるやの「アレプリス着色体験クラス」
 - ・6月東京ニューシティ管弦楽団演奏会
(メキシコ若手指揮者プリエトが指揮)
 - ・7月第2回アレグリアメヒコ(横浜赤レンガ広場)
 - ・8月メキシコシティ国際マラソン
- メルマガの配信
講演会案内(メキシコでの事業展開、メキシコ滞在40年、メキシコ演劇の父佐野碩)/資料紹介(メキシコの対日世論調査、メキシコシティスタイル、メキシコ経済の現状と展望)/大震災チャリティコンサートなど
- TV番組放映の紹介
アカプルコ/コクジラ/ティオティワカン/死者の祭り
- 東日本大震災につきメキシコ大統領、外相、駐日大使のお見舞いの言葉掲載の大使館報No.97を紹介 (了)

☆☆☆ 第18-4回メキシコ歴史文化講演会 ☆☆☆

演題:『メキシコ先住民の反乱』(仮題)
講師:山崎 真次 早稲田大学教授(メキシコ史専攻)
著書:「メキシコ・民族の誇りと闘い」など
日時:9月中旬を予定 会場:未定
(注)日時・会場など確定次第、アミーゴ会メルマガで会員諸氏にご案内します。お見逃しなくご参加ください。

☆☆☆アミーゴ会総会・懇親会は11月11日☆☆☆

毎年恒例のアミーゴ会総会&懇親会を今年は11月11日(金)午後6時30分に開催することが7月幹事会で決まりました。会場など詳細は追ってご案内します。鬼をも笑わせるスケジュールの調整を今からお願いします。「いい夫婦」の日に皆様おそろいでご参集ください。

= 編集後記 =

猛暑お見舞い申し上げます。日本列島どこもかしこも熱波襲来ですが、千天の慈雨が灼熱列島を冷やし汚染列島を清潔にしてくれることを期待したいものです。今号もまた会員諸氏からうんちくを傾けた興味深い投稿が多数寄せられ一挙掲載に踏み切りました。引き続きご投稿をお待ちします。今号開始の『私の本棚』:古今東西不問でお薦めのこの一冊を勝手紹介下さい。なお玉置副会長の「秘録」『Hotel Nikko 物語(2)』は筆者のご都合により10月号掲載予定です。乞うご期待。また編集子執筆の「メキシコ経済トピックス」は誌面の都合で休載します。[か]